

妙な子守唄

100

雪やこん／＼

あられやこん／＼

ぼくらはゆきの子

右方へ行き 右肩を下げ左上方を見る
「な」は延聲記號あり こゝは両手を始めのより
更に大きく聞く

うれしいな……前に左方に行きたるを最後の此の時は

妙な子守唄

金子彦二郎

んで、つく杖さへ重たげな風情。

行けども／＼果てしなくつゞく木曾路の檜原の傍を、と
ぼ／＼と辿つてゆく一人の坊さんの姿が、紫色に暮れかゝ
る春の夕暮の中に浮かんで見えます。墨染のお衣に網代笠
汚れた白い風呂敷包を右肩から左の脇へと斜に背負ひ込
です。しかし、其の眼に入るものは薄曇つた空と、蒼白い

■

もう日は沈んでしまつて、夜の灰色の翅がだん／＼と身
に迫つて來ます。坊さんは小手をかざしたり、足をつま
てたりして、前後左右の眼の届く限りを、物でも探すやう
な熱心さで見やりました。泊めてくれる宿がほしかつたの

夕霧をすかして見える樹立と山だけでありました。しよう
ことなしに坊さんは、傍の大きな石に腰を卸して、うなだ
れながら、「さて今夜はどうして過したらよからうか。何里
一で、へりまつしや、へりまつしや、へりまつしや、へりまつしや、

「ハテ、今のカチ／といふ音は、たしかに燧石を打合せ
る音に違ひない。カチ／＼山の白兎が今の世に出て來よう
とは思はれぬ。たしかに人が通りかゝつたのに違ひない。

だが、夢であつたらうか。」

野宿をするもよいけれど、どんな恐しい熊、狼が飛び出して来ないものでもなし、と言つて今更もと來た道を引返すといふわけにも行かない。それにお腹も空いて來たし、ぞくぞく寒さも感じて來た。十數日の旅疲れで足ももう言ふことをきいてはくれない。あーあ」と思はずため息をついてゐました。

あたりは次第々々に暗くなつていつて、今はもうお衣の色と區別のつかないほどになつてしまひました。

1

空腹と疲れと心細さとで氣を失ひさうになつてゐた坊さ

んは、突然夢からでもさめたかのやうに、すつと棒立ちになつて、うろ／＼とあちとあちこちを見廻はし、そして利き耳を立てました。

だが、この鎌から棒の飛び出し者に驚いたのは、先方の人です。

一九七八

と言つたまゝ、暫く立ちすくんでゐましたが、やがて、それが紛れもない妨さんの形と見届けるや否や、

「やう、こん畜生、今日は坊主に化けて來やがつたな。もうおのれのやうな山猫にばかされるもんか。」

と言ひながら、手にしてゐた大きな棍棒を拾ひ上げて「寄らば打のめさう」とふ身構へをしてゐます。併し坊さんはそんなことは委細構はず、無人の山奥で人に逢つたられしさから、一生懸命に「モシ〜。お願申します。この奥山で道に踏み迷うた旅の者です。どうか村里へ出る案内をして下さう。これこの通り。」

と手を合せて拜むのでした。さうかうしてゐるに、やつとそれがほんたうの人間であることを知つた先方の男は、「わしは又、すつかり山猫の奴が化けて出やがつたのだと思ひましたよ。いやびつくりした。」と言つて、振り上げてゐた棍棒をおろしました。

III

坊さんは、其の山男に伴はれ、其の住家へと急ぎまし
た。さうして路々問はるゝまゝ、自分の素性や用向など

を話しました。それによると、この坊さんは北國の或寺の住職であるが、今度三百兩といふ大金を持つて、上方の御本山に寄進に行く途中であるとのことでした。

此の正直な身の上話を聞いた山男は、もうすつかりまつ闇だから、もとより坊さんの目にはとまらなかつたが、急に目を光らして、ひとり「ヤ〜〜」とうす笑ひを洩してゐました。

四

一人が廻りついた家は、そこから十町ばかり行つた處にある立派な構への家でした。こんな所にも住んで居られるかと思はれる程の山奥なのに、非常に立派な建て方の家が其の隣にももう一軒ありました。つまり一軒しかない山家であったのです。内なども大そう頑丈に出来てゐて、いかにも物々しい構へでありました。

山男が門番と何やら笑ひながら、ヒソ〜話しかけると門番が、「まあ、どうぞ。」

と言つて小戸を明けて誘ひ入れながら、ジロリと妻い目で坊さんの顔を見ました。坊さんは此の時、「何だか薄氣味わるい人がゐるな」と思ひました。

坊さんは、いつの間にか、ぐつすり寝込んでしまひました。

五

空腹と疲勞とで弱りきつてゐた坊さんは、思ひがけなくよい人にぶつかつて、其の夜いろいろと食べあまる程御馳走を頂戴して、やがて曲りくねつた廊下を案内されて、奥の四壁半に参りました。そこには又實に見事な夜具蒲團が備へつけてありました。坊さんは久しうぶりで柔い上等な夜具の中で、思ひきり足を伸して眠ることの出来るのが嬉しくてたまりませんでした。案内した男は「御用心のよいやうに鍵をかけておきます。明朝はお起しするまでゆるりとお休みなさい。」といつて、外からビンと錠を下して引取りました。

すつとはなれた茶の間の方では、時々數人の男の高笑ひがしては、又何やらヒソーキ聲をひそめて話し合つてゐる様子であります。

六

鼠の騒ぐ音一つしない眞夜中に、火のついたやうに啼き叫ぶ赤児の聲に、坊さんはふと目を覺されました。と言つても、また實はうとくした、おぼろな覺め方でしたが、少し落ちついたかと思ふと、又ヒー／＼泣き出で、坊さんの目はだん／＼はつきりしかけて來ました。坊さんの耳には、今度、赤児の啼き聲と一緒に、一生懸命に其のむづかる児をなだめすかしてゐるらしい子守唄が訪づれて來ました。子守唄の調子には何の變りもありませんが「所かはれば品かはる」とは言ふものゝ、噴飯したい程をかいのは、其の唄の文句です坊さんは、もうすつかり目が冴えてしまひました。子守唄が餘りに風變りなのに興味を引かされて、その歌の文句を辿つて眞似て見ました。

又しきり赤児は、お腹でも痛くて居堪まれぬと言つたやうに啼き出しました。すると前よりもつと力強い聲で伴

の戀な子守唄が歌はれました。

「りんかじんと、がかじんと、りよそうせつすとごんするが、くさのあたまのさうかうとり、やまとやまとがかさなりて。」

戀な子守唄といふのは、かうじふのでした。坊さんは夜着の襟に顔を半分埋めて、ふつと笑つて見ました。が、その面白さに釣り込まれて、二度三度繰返してゐるうちに、何だか其の唄には特別の意味が籠つてゐるやうに、ふと氣がつき出しました。

りんかじんとがかじんと……………

とかう口誦んでみると、流石に學問のある人だけに、「ハテナ、『りんかじん』とは隣家人でお隣りの家の人のいふことだな。さうすると『がかじん』は「我家人」で我が家の人た。……うむ、其の次は何だけな、あゝさう〜」「りよそうせつすとごんするが」なに、「りよそう」と言ひや、旅僧即ち、旅の僧さんで俺のことぢや。「せつす……」といふ一條が「旅の坊さんを殺すと言つてゐるが」といふ謎であると分つた時、今まで面白をかしく思はれてゐたあの妙な

子守唄が、急に脳天から冷水でも浴びせかけられるやうに恐しい鯨波の聲に聞えて、坊さんは思はずる〜つと身おるひして、床の上に起き直りました。

さうして薄ぐらゝ窓明りで部屋の作り調べて見ると、どことも非常に頑丈に作りなされて、いかにも曰くがありさうな構へです。……と坊さんの頭には、夜道で逢つた男や、門番の男の一癖ありさうな面構へや、氣味わるい薄笑ひから、見知らぬ旅人の自分に、行届かぬ所のないやうなものなしぶりや、さては「ゆつくりお休みなさい」と言つて、外からビンと錠をおろしていつたことやが、みんな恐しい人達の恐しい計らひであつたと氣がついたのであつた。さう思ひ出すと、氣のせぬか、その部屋も、曾てやはりそこで命を取られた人々の血で、血腥い匂さへするやうに思はれ出した。さうかうしてゐるうちに、茶の間の方から、磨きすました出刃庖丁でも提さげた山賊の親分たちが、ミシリ〜と近寄つて來るやうにまで思はれ出して來た。「あゝ、どうしたらよからう……」と心も身に添はず只、おど〜してゐる時、妙な子守唄がまた聞えて來た。

「おゝ、さうだ、あの歌のおしまひの方をまだ考へて見な

かつた」と氣がついて、「へさのあたまのさうかうとり、やまとやまとがかさなりて」とふ謡の文句を案じて見ました。するとそれは「草の頭の艸冠を取れば、「早く」だし、「やまとやまとが重りて」は、山と山と重ねると「出」とふ字になることがわかりました。「早く出よ」とることは分りましたが、こんな嚴重な構から、どうして逃げ出せよう……しかし、あゝ言つて親切に教へてくれるからには、何とかして逃げ出せる道があるのかも知れない。とにかく愚園々しては居られない、と帶をしめ直して立上つた坊さんは、金綱の陥穿にかゝつた鼠が、あちこちと鼻先で小突き廻つて活路を求めるやうに、入口の扉を押して見たり押入を明けて見たり、窓の格子の棧を小突いて見たりしましたが、どこにも逃げ道は見つかりませんでした。

がつかりして、一時氣を失つたやうに茫然としてゐましたが、「どうせ殺されるんだ。一つ死ぬ覺悟で思ひ切つて一つ打撃しをやつて見よう。」と決心がつくと、今度は死物狂ひで、窓格子の棧に手をかけて、うん／＼押したり、ね

ちつたりして見ました。

命がけの熱心ほど、怖しきものはあまりません。一寸角の窓格子が、暫くの後、とう／＼この坊さんの脣腕で、一本外れたのでした。鬼の首でも取つたかのやうに、喜び勇んだ坊さんは、これも佛様のお冥助と報謝のお念佛を口にしながら、尙勢込んで其の隣の格子に手をかけました。かうしてたうとう三本だけ窓の格子を抜き取りましたら、窮屈ながら、どうやら體が通りさうに思はれたので、三百兩の大金の入つた胴巻だけを身につけて、やつとの思ひで死刑の牢獄を脱け出しました。

庭先に飛び下りると、子守唄を歌つてくれた、救ひの方に向つて掌を合せて、他所ながら御禮の心を捧げ、さて裏庭に廻つて、木の枝を傳つて高辯の上に手をかけました。

この時です。もう袋の中の鼠だから、どんなに大きな聲で話しても逃げる氣遣はないと慢心してゐるらしい二人の男が、

「うまく行つたね。あの坊主の胴巻の三百兩が、そつくり

頂戴出来るんだ。」

「さうへ。この頃の不景氣には、實は少々うまい酒も飲めなかつたんだが、いや、捨てる神があれば、捨はせてくれる坊主もある。まあ、あそこに押込んでおきさへすれば、急くことはない。たかゞ／＼坊主の一足ぐらゐ、ゆつくりと仕事に取りかゝるとしようぢやないか。今夜は久しぶりでよく酒がまはつた。」

「それもいい。だが俺は早くその三百兩の小判大判の額が拜みたくなつたよ……」

などゝ、語り合ひながら、身仕度にでも取掛つてゐるらしい氣配がしました。

坊さんは、もう生きた心地もなく、その高屏を乗り越えると、後をも見ずに、又方角も考へずに、足に任せて、どん／＼、山よし、谷よし、草原よし、駆けつけました。夜がほの／＼と明けかゝる頃、跣足^{はだ}足を傷だらけにした坊さんは、やつと麓の村里に辿りつきました。さうして、その旨を早速土地の代官様に訴へ出ました。

數日の後、幾十人の豪傑達からなる一隊が、その坊さんの案内で、この山賊どもの住家へ押し寄せて、頭から子分まで残らず搦めとつてしまひました。さうして、それぐれお處刑を申渡されました。只一人、其の夜妙な子守唄を歌つて、坊さんの危険を救つてくれた女だけは、代官様から手厚いお褒美と共に、おほめのお言葉さへ頂戴したのでした。その女といふのや、やはりこの山中を通りかゝった旅の者であつたのですが、山道に迷つてこの宿に紛れ込み、身についたすべての財物を取り上げられた上、そのまま、乳母として召使はれてゐる氣の毒な女なのでありました。この乳母は、その家を山賊の住家と知らないで泊り込んで、氣の毒にも金や命を取られてしまふ人達を、何とかして救ひたいと思つて、真夜中になると、わざと赤兒をつねつて啼かせ、それを寝つかせるのに事よせて、妙な子守唄を唄ひそれとなしに危険を知らせてゐたのですが、今まで誰もそれと氣のつくものがなくて、みんな哀な最期を遂げたのに

その坊さんだけが、よく唄の意味を悟つて、遂に山賊退治の手引きをしてくれたのでした。

代官は乳母のよい心掛と頗智とにめでゝ、其の家やら財産やらをそつくり乳母に與へました。乳母は大そう喜んでそこに茶店を開いて、北國筋から上方へ、上方から北國筋へと往き來する數多の旅人たちを、心から慰めねぎらつて

やりました。

信濃の木曾路に、昔、名高い姥が茶屋といふのがあつたといふ。その茶屋は今も残つてゐるかどうかは分らないが乳母が機轉の子守唄の妙な文句だけは、いつまでも悲しい涙っぽい餘韻を傳へていくことあります。

(一四二・一八)

幼兒の眼

東京女高師附屬幼稚園

幼兒の眼、題目は如何にも面白く考へられるが、茲では専ら衛生的の立場から、家庭や幼稚園保育者の参考資料として、事實を出發點とした、注意について述べる考へです。

といふのは、去る一月當附屬幼稚園の入園検定に於て、身體検査の結果の事實です。検定人員男兒が合計九十八人、女